1

自己紹介

本間照雄　蟹座　O型　寅年生まれ

2

2

3

4

5

6

7

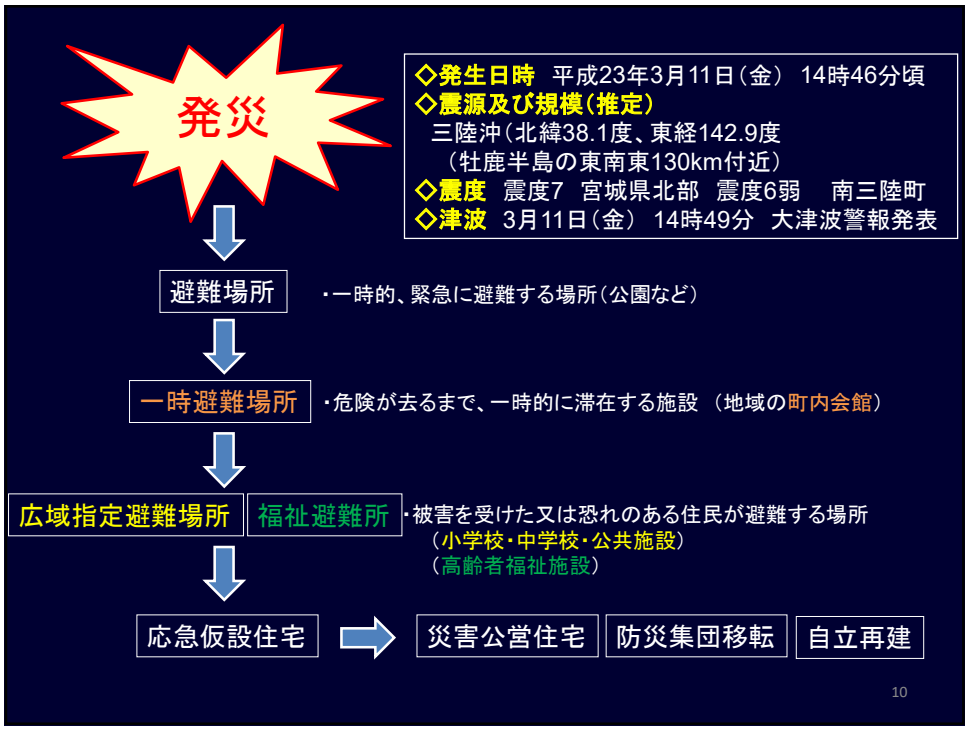
被災地復旧の様子（宮城県南三陸町）

8

8

南三陸町志津川地区（震災から1ヶ月後の様子）

9



10

1-1　集団避難（町外二次避難所）

◇一次避難所：49カ所　10,368人

（町内41，登米市8）H23/03/20～04/21時点

◇二次避難所：56か所　2,246人

（町内6，登米市6，栗原市6，大崎市34，加美町1，上山市1，にかほ市2）H23/03/20～04/21時点

計　105カ所

（註）・自主避難者を除く
・避難者数（最大時）

出典：南三陸町保健福祉課避難対策班調べ

11

11

1-2　分散する応急仮設住宅

1　長屋型仮設住宅

（1）志津川地区	22か所	648戸	1，785人（587世帯）
（2）歌津地区	17か所	644戸	1，853人（534世帯）
（3）入谷地区	7か所	161戸	394人（151世帯）
（4）戸倉地区	7か所	256戸	715人（232世帯）
（5）南方地区	2か所	351戸	964人（313世帯）
（6）横山地区	4か所	135戸	388人（120世帯）
計	59か所	2，195戸	6，099人（1，937世帯）

2　民間賃貸（見なし仮設）住宅

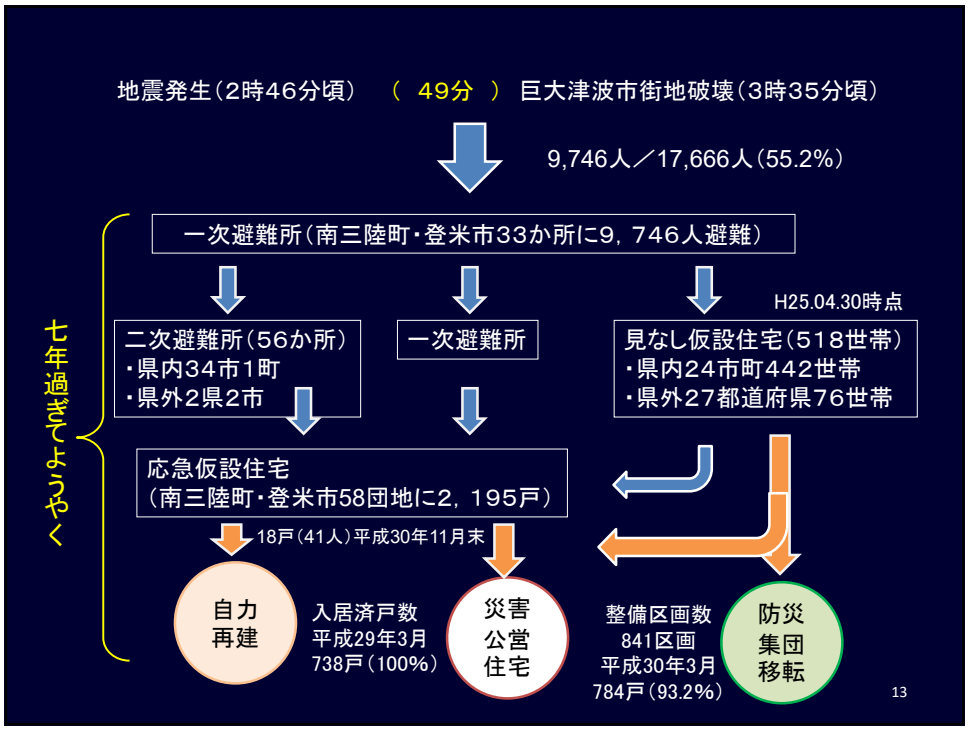
（1）南三陸町内		65戸（世帯）
（2）宮城県内	12市12町	682戸（世帯）
（3）県外	31都道府県	226戸（世帯）

計　県内747戸　県外226戸　計973戸（世帯）

（平成24年1月25日現在）

12

12



13

行政・町づくり研究者の意向とは裏腹に分散避難・分散再建

小規模集落単位での、避難生活・災害公営住宅・自立再建

・家屋倒壊はゼロor100状態の為に、被災者は長屋型応急仮設住宅に集まった。
・この為、在宅で避難生活を続ける被災者は少なかった。
・また、インフラ復旧に時間が掛かり、広域避難者も少なからずいた。
・このことが、人口流出の要因ともなっている。

14

能登半島地震被災者の避難状況概観

15

15

16

17

18

19

20

住宅地に近接する公園に設置されている仮設のお風呂（2024-02-26）

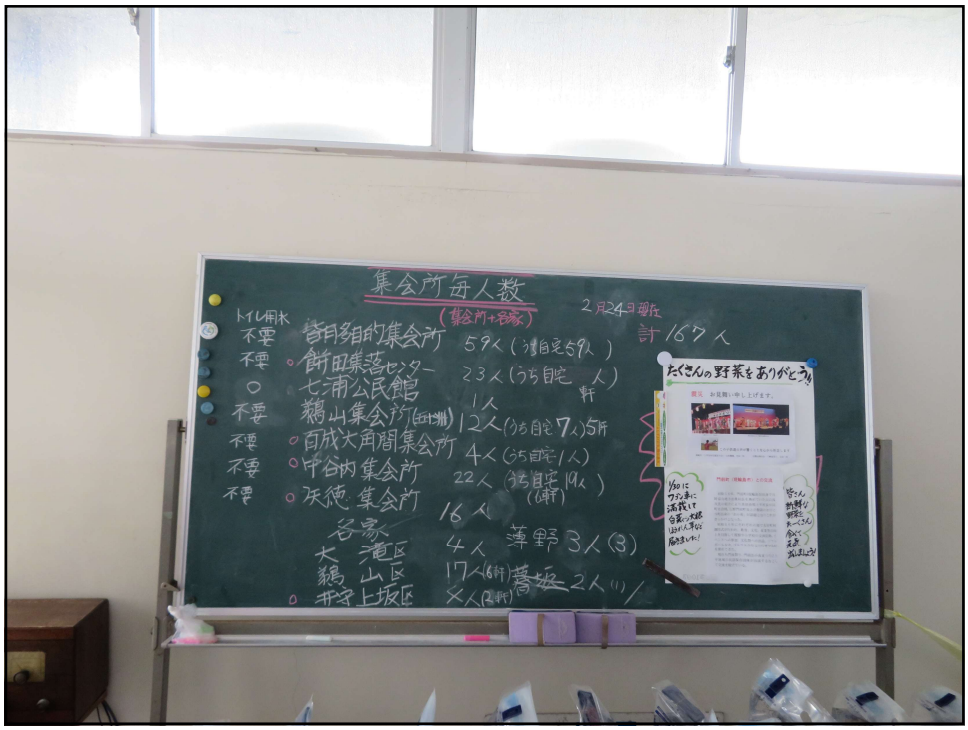
21

七浦（しつら）公民館：輪島市門前町指定避難所（2024-02-26）

22

集会所毎人数
(集会所+名家)
2月24日現在
トイレ用水
不要 皆月組的集会所 59人 (うち自宅59人)
不要 餅田集落センター 23人 (うち自宅 人)
○ 七浦公民館 1人 軒
不要 鵜山集会所(白山地区) 12人 (うち自宅7人) 5軒
不要 百成大角間集会所 4人 (うち自宅1人)
不要 中谷内集会所 22人 (うち自宅19人) (1軒)
不要 庆徳集会所 16人
名家
大滝区 4人 薄野 3人(3)
鵜山区 17人(6軒) 菩提 2人(1)
井守上坂区 4人(2軒)
計167人
たくさんの野菜をありがとう!
輪島市

23


集会所毎人数
(集会所+名家)
2月24日現在
トイレ用水
不要 皆月組的集会所 59人 (うち自宅59人)
不要 餅田集落センター 23人 (うち自宅 人)
○ 七浦公民館 1人 軒
不要 鵜山集会所(白山地区) 12人 (うち自宅7人) 5軒
不要 百成大角間集会所 4人 (うち自宅1人)
不要 中谷内集会所 22人 (うち自宅19人) (1軒)
不要 庆徳集会所 16人
名家
大滝区 4人 薄野 3人(3)
鵜山区 17人(6軒) 菩提 2人(1)
井守上坂区 4人(2軒)
計167人
たくさんの野菜をありがとう!

24

孤軍奮闘の指定避難所責任者（公民館長）

25

指定避難所で一端支援物資を受け入れ、その後仕分けして自主避難場所に配る物資

26

日中5人／夜34人避難（地元住民を三重県津市職員が支える）
旧剱地中学校輪島市門前町指定避難所（2024-02-26）

27

生活クラブ
小間生（おもう）公民館指定避難所（2024-02-27）

28

宮地交流宿泊所「こぶし」能登町宮地地区（2024-02-27）

29

何でも受け入れて、地域振興に生かす。（断らない→行政が支援したくなる地域づくり）

30

支援者を支える支援CSR（炊き出し用野菜を提供）
NOPPOKUN
NOPPOKUN野々市市（2024-02-27）

31

避難者応援家電バンク
駐車について
建物の前に
おとめ下さい
野々市市社協の「家電バンク」（2024-02-27）

32

33

能登半島地震被災者支援に向けて

CCSWを意識した私見的アプローチ

34

34

わずか数人ですが「言葉のかけら」を紡ぎ、その「振る舞い」を重ねて得た学び

・ここの人たち（地域住民）の気持ちを支えたいだけ。

・ここを離れたくない。家が潰れるときは、私の人生が終わるとき。

・あと10年しか生きられない。家の修理に多くのお金は掛けられない。

・こんな話しは、ここだけのこと。忘れて下さい。

・ボランティア（NPO）に対する拒否的態度と、「活動は『自己完結で！』」の張り紙。

・この集落を離れる人は誰もいない。知らないところに行くなんって考えられない。

・炊き出しは、お母さん達を楽にしてあげたいから、やってもらいたい。

・15年、20年の地域づくり活動が、この災害で役に立った。

・衣料・食事中心の支援に留まらない「生活」を支える支援（CSR等）

35

35

東日本大震災（津波・原発）vs能登半島地震から見えてきた現状

◇指定避難所/応急仮設住宅での避難生活→被災住宅での避難生活

◇短い時間での選択と決定→同じ構図

◇地域住民リーダーの献身的な活動と地域愛→同じ構図

◇支援を受ける能力（受援力）→被災地の地理的条件でバラツキが大きい

最も特徴的なのは、「在宅避難者」の多さ！

36

36

能登半島地震支援で提起された課題

◇在宅避難者が多い

・・分散した被災者への支援ライン確保が大変（従来とは異なる工夫が必要）

・・生活環境の安全・安心維持とサードプレイス（third place）の重要性

・・長期間の避難生活に相当無理が生じる（多様な選択肢の提示による誘導）

◇生活基盤の甚大な被害で生活再建の先が見えない

・・過去の事例等を示しながら、これから必要となってくる事柄の情報提供

・・「地元に残る」「広域避難する」いずれの選択でも、それぞれの家庭のありたい姿に近づける選択が出来るような判断材料を提供する。

・・多様な再建（年齢・資金・場所に応じた再建）の姿の可視化

37

こうした状況下で、私たちは何が出来るのか！

避難所に行きたくない（ここに留まる）←物資支援は指定避難所に集約

↓

◇様々な制約の中にあって、地元住民は支え合って乗り越えようとしている。

◇住民の想いやそれを叶えようとしている地元リーダーの想いや工夫は、
今回の災害で突然生まれた訳ではない。

◇こうした住民の災害との向き合い方は、「地域力」そのものではないだろうか。

↓

こうした、住民の想いや工夫を支えるのが、
本来の『住民主体の被災者支援』ではないか。

38

住民の想いや工夫を支える

『住民主体の被災者支援』

私たちに求められているアプローチは、

住民の想いや工夫の実現可能性を高める

- ・ニーズの把握（どうありたいのかを知る）
- ・諸制度へつなぎ（公的制度を生かす）
- ・ボランティアへのつなぎ（隙間を埋める）
- ・地域力を支える（コミュニティー構築支援）

39

39

私たちに求められているアプローチは、
このアプローチは、何処を目指すのか。

地域力向上

- ・ニーズの把握（どうありたいのかを知る）
- ・諸制度へつなぎ（公的制度を生かす）
- ・ボランティアへのつなぎ（隙間を埋める）
- ・地域力を支える（コミュニティー構築支援）

制度改革

平時・有事の区別を超えた『CCSW』の振る舞いなのではないだろうか

40

被災前の地域（community）

各世帯の経済的社会的諸事情で選択

自力再建

災　害
公営住宅

防　災
集団移転

最も支援を必要とする人々が，被災地の復旧・復興過程で，地域コミュニティという従前の生活を支えたネットワーク資源（ Social Capital ）を奪われてしまう。このことが，日本の復興が有する最大の課題である（越山健治，2007）。

コミュニティの再編・再構築が必須

出典： 越山健治，2007「都市の復興と新たなコミュニティの形成」『震災と社会－復興コミュニティ論』，96-7，弘文社．

41

41

◇土地に刻まれ記憶された歴史は，文化的伝統として結実し，危機に向き合う際の仕組みとして機能する。

◇生業の営みを基盤として形成された生活文化は，自律的な強靭さを備えている」のである。

（河村ほか編2013）

生活文化や生業に基づいた活動は、自律的な強靭さを持ち危機に強いのである。

地域を熟知している住民は強い！

→長い復興・発展（まちづくり）を担う住民として彼らを支える。

42

42

「住まいの場所」は全く人間存在の基礎であり、すべての人間活動の背景となるだけではなく、個々人の集団に対しての存在保証とアイデンティティ（自分が自分であること）を与える（Relph,1976）。

居住地に対する愛着は、居住期間とともに強まるが、同時にその愛着はその人を取り巻く物質的環境との関係よりも、他の人々との個人的な相互関係の方に関わっている（Hampton, 1970, p115）。

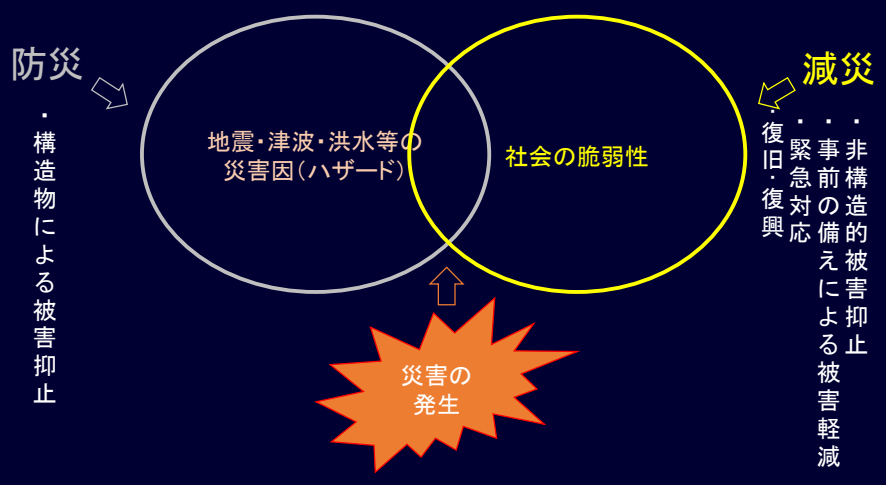
◇人々と地域との関わりを再評価する必要がある◇

Edward Relph,1976"*PLACE AND PLACELFESSNESS*"
（＝高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, 1991「場所の現象学」筑摩書房）

43

43

災害は、社会的な現象で社会的に構築される



出典：立木茂雄,2016,『災害と復興の社会学』萌書房,19頁.

44

我々は、惨害記録と哀話のみ綴っているべきではない。暗い話ではなく、根強く再興していく日本人の力に着目し、次の被害を少しでも軽減するために、細心の注意を怠らぬように導いてゆくのが、我々のなすべきことと信じている。（山口1943）

ご静聴ありがとうございました

参考文献 山口弥一郎，1943，『津波と村』恒春閣書房．

45

45